

No.80 contents

- 2 〈絵画〉総評
- 3 〈絵画〉作品も展示も実験の場として
- 4 会員勉強会・支援講座
- 5 2023春季二科展 受賞者・選抜出品者
- 6 〈絵画〉選抜出品作品 寸評
- 8 〈彫刻〉総評
- 9 〈彫刻〉前年度受賞選抜者作品
- 10 ローマ賞 研修報告 計報
- 11 第45回定時会員総会・絵画部会・彫刻部会報告
- 12 第107回二科展日程表・出品規約QRコード
- 13 第106回二科展巡回展
- 14 第107回二科展巡回展日程(予定)
- 15 支援・地区活動報告
- 16 第107回二科展 支援講座・ワークショップ・講演会
- 2024春季二科展新企画予告 支部長交代 お詫びと訂正
- 事務局だより 表紙の言葉 編集後記



春季

発行人：生方 純一 発行：公益社団法人 二科会
<https://www.nika.or.jp/> TEL：03-3354-6646





フリースペース 絵画・彫刻融合展示



個展ブース

第二の軸企画である受賞者選抜展には昨年の本展の受賞者から会友25人・一般23人が選抜され、一傾向に留まらない多様な表現の作品が3室まで展示されました。会員の投票によって多くの支持を得て春季二科賞に輝いた福岡ゆらりの作品

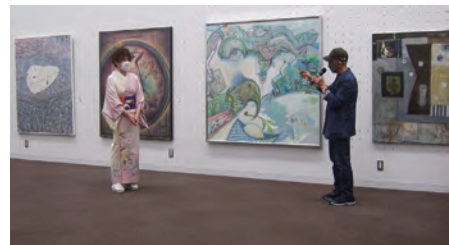
近藤隆弘は珪藻土等を用いた混合技法の抽象画の3点連作で、線に影を付け平面抽象に留まらないレイヤーを意識した意欲的な仕事でした。会友の中澤純代は樹木を日本画のような深みのあるトーンで描いた心象的な具象画、一般の塩川晴美



フリースペース作品 展示8室



展示2室にて 授賞式



研究会



ギャラリートーク

絵画部

作品も展示も実験の場として

展覧会部部長 山中 宣明

増床・期間延長して2回目となった今季の春季二科展は都美術館の感染防止の制限も解かれ入場者も昨年より増え活況の手応えを感じつつ無事終了しました。入場者・美術関係者や各方面から新鮮味を感じるとの声が多数ありました。

絵画部の企画ごとに見てみると骨格である会員の展示数155点を抽象的傾向・具象的傾向別に打ち出した部屋を展示委員のプランに沿って設定し、力作の並ぶ展示となりました。

自由な表現を目指したフリースペースには今回は理事以外にも有志会員の意欲的な15点の絵画と3点の彫刻を空間を大切にゆったりと展示し、昨年以上にコンセプトが明確に伝わる展示となりました。

第二の軸企画である受賞者選抜展には昨年の本展の受賞者から会友25人・一般23人が選抜され、一傾向に留まらない多様な表現の作品が3室まで展示されました。会員の投票によって多くの支持を得て春季二科賞に輝いた福岡ゆらりの作品

近藤隆弘は珪藻土等を用いた混合技法の抽象画の3点連作で、線に影を付け平面抽象に留まらないレイヤーを意識した意欲的な仕事でした。会友の中澤純代は樹木を日本画のような深みのあるトーンで描いた心象的な具象画、一般の塩川晴美

は顔や手を構成的・イメージ的に配置し、自分の描きたい方向性を誠実に模索する制作態度に好感が持てました。会員や出品作家によるギャラリートークも実施し今後の展開につながる忌憚のない批評も交わされ有意義な時間となりました。

来期はさらに一流一派にとらわれない表現を標榜する二科会にふさわしい作家が選ばれ、振幅にとんだ個展形式展示になることを期待します。

来季の春季展にはさらに展示に膨らみを持たせ新たな出品者層にも働きかけるコンテンツとして小品カテゴリー・公募部門を新設し、春季展が作品も展示も文字通り実験の場として機能するべく、思い切った新鮮味のある展示プランを、展示委員会が今後検討して参ります。



2023春季二科展

2023. 4. 19~5. 2 東京都美術館

絵画部

2023春季二科展総評

生方純一

春季二科展はもと会員だけの展覧会で、実験的な作品を試す場としていました。

その試みを経て秋の本展に挑戦する作品を仕上げる、これが春季展の目的でした。しかし近年は何時もの作品の情性とも思われる作品が目につくようになり、更に発奮を促すために会員同士の研究会として特別講座を企画しました。

山中宣明先生には画材の特性や使用方法など自作の表現事例などを交えての講義を、また中原史雄先生には東西の名作の魅力や観た、取り入れ方などの講義をいただき、美術書の紹介などもありました。

会員の今後の制作や指導に反映されることを期待しています。

また、会期後半には田川絵理先生による出品者向けの支援講座があり、西健吉先生の講座とワークショップがありました。様々な観点から企画を試みた春季展でした。

春季展は、数年前から会員ばかりではなく、前年の秋の本展の受賞者を選抜して機会を与えています。本年も1〜3室は第106回二科展の受賞者の選抜作品を展示し、春季賞の授賞対象としました。

展示日に参加した絵画部の会員

による投票で、本年は春季二科賞に福岡ゆらり（愛知）、春季賞には黒川壽子（千葉）、木村隆行（愛知）の三名が受賞しました。

また、従来の展示に新風を吹き込むべく、昨年からフリースペースや個展形式のコーナーを設けて新たな展示を試みた結果、予想以上に評判が良く、今年も展覧会部の綿密な会場構成のもと、フリースペースには絵画部から15名が応募し、彫刻部からも3名の作品が展示されました。展示も作品も見応えがあり、心地いい展示空間になったと思います。

個展形式の空間は「7つの個」と銘打って7名の個性的な作品を一人10メートル分の壁面展示としました。特に今年は写実的な作品が多く、それぞれの完成度も高く見応えがあったとの評判です。

力作を出品した7名は、近藤隆弘（愛知）、中澤純代（神奈川）、畠中富雄（大阪）、今泉光治（神奈川）、塩川晴美（静岡）、小原禎二（神奈川）、前川普佐雄（埼玉）の7名です。称賛の拍手を送りたいと思います。

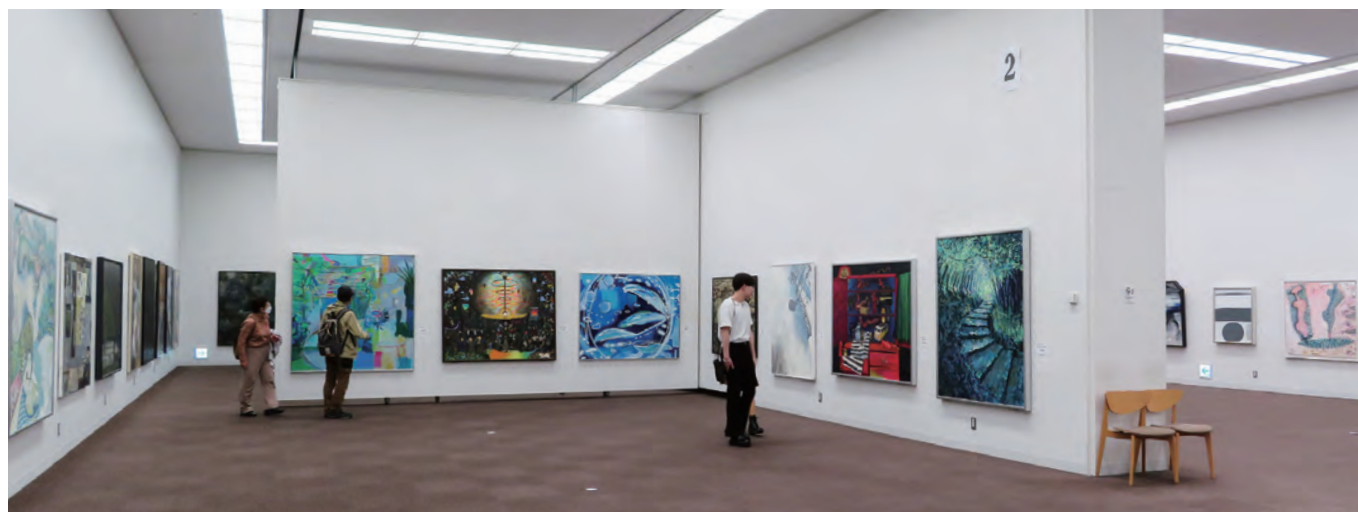
今回の春季展を顧みて、来年は「フリースペース」や「個展形式コーナー」を会場の前面に打ち出してアピールするのも面白いのではと感じました。



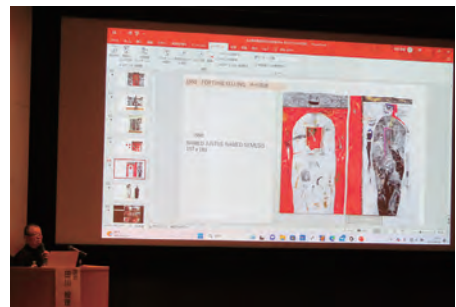
展示1室 春季二科賞 福岡ゆらりさん



会場入口



選抜作品 展示2室



まったく自己の狭小な認知から世界を覗いている、その体験や実感をお話ししました。

些細な何気ない出来事にしかみえないかもしれないトコロに、世界のありように直結して実相が見える一瞬がある、その生(なま)の体験、そこから理解する以外にどこから思いや感覚の核ができるというのか？

20年程前、制作で大事にしていることは？との設問に「PAATHOS」と書いた。その後このことは変わっていない。

理論や知識を求める欲を持たない、(ついでにブラン

ド志向も物欲もない)まさに無手勝流のままここまで来てしまいました私の実感です。

年寄りになったので、この拙文章を読んで下さる方々に「慌てないで、飼いや慣らされないで、手応えのある、嘘の無い一歩一歩を生きて欲しい」と、言うてもよいですか？

絵描きは誰かの跡を追って描くこともできない、その都度ゼロ地点からその制作の旅立ちを生きるもののように思います。さあ喜びを持ってひとりひとりの新たな航海へいざ出発!!

BON VOYAGE!

二科展に出品する一般参加の方々を対象に、「自分らしい絵画制作のポイント」と題し、個性的で自由な制作を行うために、共通する構図の基礎と色彩の要素について、西洋の名画と私の作品を例に照らし合わせながら解説しました。

その後、ワークショップでは、主題に基づいてのイメージ描写(画用紙、鉛筆)に取り組んでもらいましたが、受講者はアドバイスされたことを熱心にメモを取り、楽しそうに鉛筆を走らせている姿を見ることができました。

今回、支援講座の講師を務めました。資料準備を通して、改めて多くの事を学ぶことができたことに感謝すると同時に、講座においても終盤での質問の応答や、ワークショップでテーブルを廻る中で、直接、受講者とのコミュニケーションが取れたことが何より良かったと思います。

今後に向けても、二科会の前向きの活動である勉強会や支援講座が、継続して実施され、出品者増やレベルの向上に繋がることを願っています。

支援講座を終えて

田川 絵理

自分らしい制作のポイント

西 健吉

2023 春季二科展 受賞者・選抜出品者

絵画部

◆7つの個

(会友)

小原 禎二〔神奈川〕
畠中 富雄〔大阪〕
中澤 純代〔神奈川〕
前川 普佐雄〔埼玉〕
(二般)
今泉 光治〔神奈川〕
近藤 隆弘〔愛知〕
塩川 晴美〔静岡〕

◆前年度選抜者

(会友)

久田千恵子〔愛知〕
前田喜久子〔東京〕
平澤紀久子〔京都〕
磯貝 文利〔愛知〕
すぎもと和〔愛知〕
森 千恵〔愛知〕
竹川 洋子〔神奈川〕
菊島ひろ〔山梨〕
木村 隆行〔愛知〕
久田千恵子〔愛知〕
黒川 壽子〔千葉〕
佐藤 幸光〔東京〕
大西 正昭〔福岡〕
島崎 紗椰〔京都〕
相原 俊幸〔神奈川〕
嵐 蒼樹〔石川〕
有澤 英子〔石川〕
大古 正子〔茨城〕
川島 正〔熊本〕
桑子 純子〔愛知〕
志波 宏子〔和歌山〕
高橋 さち〔千葉〕
田中 勢智代〔愛知〕
宮田 春奈〔石川〕
森 泰秀〔佐賀〕
山本 知子〔鳥取〕

(二般)

飯干 智子〔愛知〕
伊藤 茂〔岩手〕
伊藤 裕〔愛知〕
井上 貴義〔福岡〕
上杉 昭芳〔新潟〕
及川寿美子〔宮城〕
亀田 恵子〔神奈川〕
川路 聡美〔富山〕
齋藤 照美〔栃木〕
島村 薫兵衛〔千葉〕
竹中 美浪〔愛知〕
長門 春美〔埼玉〕
中村 月江〔東京〕
野口 晃〔東京〕
濱本安紀子〔石川〕
林 里美〔滋賀〕
春木 凛〔大阪〕
福岡ゆかり〔愛知〕
藤原 弘美〔大阪〕
丸山良二郎〔鹿児島〕
宮崎 洋子〔石川〕
三輪 修〔宮崎〕
村上 元彦〔愛知〕

彫刻部

(会友)

角谷 豊明〔新潟〕
細田愛由美〔島根〕
篠木 玲子〔埼玉〕

浜田 修子〔東京〕
玉田 真理〔東京〕

(二般)

宮川 晴香〔神奈川〕
吉田タカ子〔沖縄〕

春季二科展企画 会員勉強会・支援講座

埜 珠世

卒業のない美術学校として

山中宣明

難しい、けど素晴らしい

中原史雄

2023 春季二科展の会員勉強会(4月20日)と支援講座(4月29日)が開催されました。それぞれの講師の先生と会場ご参加の皆様の様子を纏めてご報告いたします。

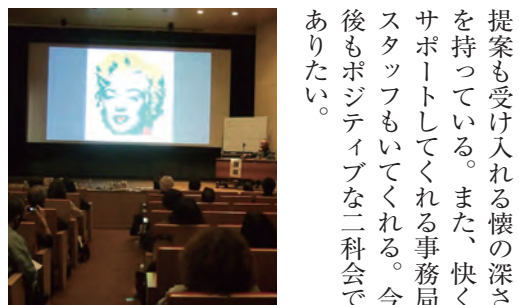
4月20日は春季二科展での新しい試みとしての会員勉強会が行われました。

午前中、生方理事長の話で幕をあげ、山中先生の表現と技法の発展や混合技法と素材についての講座、午後は中原先生が「一歩を踏み出すには何が」をテーマに画業60年ならではの話をされ、最後に一時間、参加会員と支部の取り組みや「これからの二科会についてのフリートーク」、前向きなディスカッションで、会員の皆様の熱い思いが寄せられた時間となりました。これからの二科会を考える貴重な時だったと思います。参加者43名。

4月29日 支援講座。
午前中は田川先生の、昨年の大回顧展での画像を見

せていただき、ご自身の作品を追って、山下洋輔の曲と共に、デッサン表現が分解していく様が紹介され、また、折々の感銘を受けた事柄や面白いエピソードを交えて作品の紹介など、独特の語り口で会場を楽しませた講座でした。

午後は西先生の専門的な観点からの画面構成理論や独自の作画方法を、スケッチから構成の実地による講演。最も大事なことは構図、ムーブマンであると語り、絵の中の主色と補色のお話、制作に行き詰まった時のヒントなど、壇上ですっと立ったまま、鹿児島弁を交えて熱く語られました。そして、特選受賞時に「マチエールだけに囚われてはいけない」と東郷先生から学ばれ、現在の「浜の女」に至られたこと、土台と柱が大切であることを講義され、ワークショップでは画用紙に「ガラスコップが倒れて水がこぼれている様子」を鉛筆描写する」の課題に約70人の参加者が取り組みました。



昨年の春季展では、出品者への応援として講演いたしました。今回は中原先生発案の会員勉強会に講師として参加させていただきました。公募団体はギルド(職能組合)の機能や役割も持っています。つまり発表の場であると同時に作家同士がお互いの芸術観を語り合い技術も情報交換し高め合うための組織でもあるわけ。学びの場として表現と技法の歴史、作品と素材と表現の関係性などについてのお話や、mixed media(混合技法)の表

現を拡げる可能性と堅牢性について諸刃の剣であることとを、実際に使用している画材などを紹介しつつ、体験をもとに自戒を込めてお話しさせていただきました。取り上げた海外作家や岡倉天心の果たした役割への想いが中原先生と偶然重なる部分があったことも意を強くしました。講演後の会員との意見交換会も大変貴重な機会となりました。

遠路からのご参加やアンケートにご協力くださった会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

もう20年も前のこと、「僕の絵を見にくれなにか」と吉村勲先生から電話があった。二科展の搬入が迫ったある晩のことだ。体力の衰えで、筆に勢いが無いと自覚されながら、出来栄えが心配になってしかたがない。

そこで、軽やかなリズムがあるなどと、言い繕っての帰り際、「今日はいい日やった、描くって難しいなあ、けど素晴らしい」と涙を浮かべて呟かれた。90歳を過ぎた実績のある画家でも、自作の評価となると、

厄介そのものなのだ。近頃、「会員になったら、何も言って貰えない」と何度か聞いている。会員は、後進を育てる立場でもあり、それを求められる。だから、自分を研ぐとともに、互いに刺激し合える場を大切にすることが必要なのだろう。さて、さて3,000円も参加費を払っての「会員勉強会」、はたして集まってくれるのか不安でもあったが、鹿児島や長崎から次代を担う人たちも含め、多数の参加者を迎えることができ、熱い一日となった。

二科会は、こんな唐突な提案も受け入れる懐の深さを持っている。また、快くサポートしてくれる事務局スタッフもいてくれる。今後もポジティブな二科会でありたい。

2023春季二科展 選抜出品作品から——作品寸評



川島 正 「古株に草花が」 F100



前田 喜久子 「木の芽時に」 F130



井上 貴義 「和みの刻」 F100

画面上部に金属的な色の植物をアンテナの様に配し、木の根と対比させる事で重苦しくなりがちなモチーフに新鮮味を出している。左下の丸い切り口が花と呼応し作品を大きく個性的に見せている。幻想的作品。（寺田 眞）

背景の空間と同色の色面が左下に面白く入り作品に一体感、おもしろさを感じる。黄色や紫が効いて色彩が響き合っている。中央部の家や植物がアクセントとなり画面上の効果を出している。人物にこだわらぬ方が、よりスケールの大きい作品となるように思う。（寺田 眞）

破綻がない画面構成とたしかな技量を感じさせるが、「和みの刻」の題名なので画面一面の技法がうるさく主張し過ぎで、表層の被膜も同様、省略と簡略化をするモチーフの浮遊、空間が一体化して見やすくシヤープでクール作品になると思う。（皆川 恵子）



三輪 修 「過ぎ去りし日々Ⅲ」 F100



山本 知子 「回想―23」 F100



飯干 智子 「時空」 F80

一つひとつの登山用具を丁寧に描き上げていて、作者のモチーフに対する愛着がしっかりと表現された秀作である。段ボール箱の表情も面白い。上部と手前のモチーフが構図的に繋がりがあるとさらに良かった。（粕谷 正一）

背景の樹木はモノクロームの色面で描かれ、人形は白黒写真を反転させたソラリゼーションの技法で制作していて、同一画面に視覚的な変化を取り入れている。今後、色彩やモチーフがどのように変化していくのか興味深い。（粕谷 正一）

植物の種子か三葉虫の類とも見える不思議なものが土塊から現れている。その様子は異様だが、どこか親しみも感じる。明るいボデイに黒い突起物がアクセントとなり、画面を引き締めている。色を押さえる事で確かな存在感を出している。（寺田 眞）

2023春季二科展 選抜出品作品から——作品寸評



木村 隆行 「貝音」 F130



黒川 壽子 「線の解放」 S100



福岡 ゆらり 「深淵の核」 F130

■春季賞 木村 隆行 一見暗く地味な作品に思うが青味がかった墨色のラインの中に寒色系、暖色系の濃淡がうまく配され、また細やかな点描や線のつけ方が作品に表情を作り、見る者を飽きさせない。見る程に次々と発見があり、じっくりと見応えのある作品。（寺田 眞）

■春季賞 黒川 壽子 作者のイメージした動物や街並みがドロイングのようなスピード感のある線で形態を構築している。また、白い空間は微妙な色味もあり、削って地を見せていたりマチエールの工夫もある。独特の世界観を感じさせる作品である。（粕谷 正一）

■春季二科賞 福岡 ゆらり 画面中央にセーラー服姿の少女が背を向けてしゃがんでいる。少女の周りに白を基調とした中間色の厚く盛り上げた絵の具が点在し、鉛筆や色鉛筆で消え入りするような線描も見ええる。思春期の儚げな雰囲気を見事に表現している。（粕谷 正一）



伊藤 裕 「ハビタブルゾーン」 F130



林 里美 「Parallel World '23-1」 F130



菊島 ちひろ 「なみね～spring～」 F100

伊藤 裕 沢山の目があるグロテスクな奇妙な生物を画面に大きく入れたインパクトのある大胆な作品で、意図的な考えを暗示させる。ただバックと右下の流れのある太い線の所は強過ぎて主体と対峙してしまうので一考を。（皆川 恵子）

林 里美 美しい色彩のフォルムが空間に漂い揺らめく。感性の輝きを感じさせる。少し花らしきフォルムの大きさ描き方が一律で、線の流れが良いので余分な箇所を整理することにより、さらに見る人に作者の世界観を共有出来る作品になります。（皆川 恵子）

菊島 ちひろ 独特な色調が響きあい、波と人物との融合は色彩と動きのある線が相まって深い精神性を表現している。ただ中央の水色の部分はグレースなどで色をのせ、顔に沿った形も入れた方がより強い思いが伝わる作品になると思う。（皆川 恵子）

2023春季二科展 彫刻部 前年度受賞選抜者作品



篠木 玲子 「残光」



細田 愛由美 「ぬくもり」



角谷 豊明 「SHS」



玉田 真理 「イースター」



浜田 修子 「マスク」



吉田 タカヨ 「満たす」



宮川 晴香 「スニーク、スニーク」



彫刻部

2023 春季二科展 総評 前田耕成

新型コロナウイルス感染症予防に対する制限緩和が進む中、新緑の上野公園内東京都美術館で4月19日から5月2日まで、2023春季二科展が開催されました。彫刻部では会員、会友と前年106回展の受賞者が招待出品し、総数65点が展示されました。

と鑑賞者の共同作業によって完成をみる作品や、地球の終末を暗示させるようなインスタレーション。これらは従来の彫刻の概念を超えた表現でした。そしてこの部屋にはもう一つ、新たな環境に置かれたサブジェクト（猫）の作品があつて、これは、作り手とサブジェクトの関係性を考えさせられる作品でした。

数年来、絵画部との融合展示について検討されてきましたが、今回のように事前にフリースペースに出品する作家が決まり制作展示する方法は、春季展の趣旨に明快にかなっていい良かったと思います。

彫刻展示室では招待出品作品の質の高さに驚かされましたし、これから作者が彫刻家として活躍していく道が見えるようでした。そして、長いこと共に発表してきた仲間たちが、作品の中で個々の実験を実践し、模索していることに何よりも感動しました。

ローマ賞 研修報告

釜山ビエンナーレ2022
二ノ宮裕子
(第104回展 ローマ賞)

第104回二科展でローマ賞を受賞、研修の機会をいただき、まずこれまでとは異なった視点から創作について考えてみたいと思った。歴史や風土は人を育み多大なる影響を与える。自分の想像を超える土地はどこだろうか、北欧、中央アジアなど興味は尽きなかったが一番身近でありながら知らないことの多い韓国に目を向けることにした。研修の対象は、世界のアー



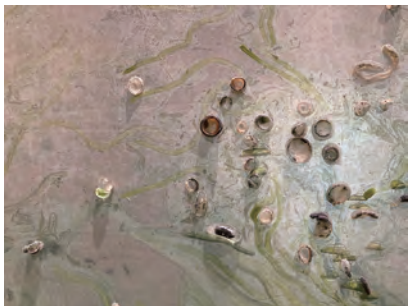
釜山現代美術館外観



F・バーロウ(イギリス)

トシーンにおいて常に高い評価を得ている釜山ビエンナーレ、今回は「WE, ON THE RISING WAVE(私たちは立ち上がる波の上で)」をテーマに26カ国から選ばれた64作家・チームにより構成されていた。釜山は韓国第二の都市であり、鎖国、戦争、植民地支配から解放と様々な波を越えて発展を遂げて今に至る。交通の要衝であり歴史的にも日本との関係は大変深い。

メイン会場の釜山現代美術館に足を踏み入れると様々な漂着物を壁面に繊細に配置した作品に出迎えられた。その先に出現したのは巨大なコンクリートの塊からなるF・バーロウの作品で、その圧倒的な爆音さえ感じられるような破壊力に度肝を抜かれた。船のマスト、漁網とシーソーのような全体の形状からは、近代化の象徴としての力強さと共に、汗と油の滲みを感じられた。またイヌイットの作家やインドネシア移民でオランダに生まれた作家などによる素朴画や手仕事による表現は、海にまつわる民族の記憶をテーマに釜山の辿ってきた歴史と個人の歴史を重ね合わせた「今とどう向き合うのか」という大きなテーマを抱えるも



漂着物の作品

のでありながら温もりを感じさせ、特に印象に残った。これらの作品は、一本の線を引く、編む、染めるなど、人の手によって作り出される痕跡に宿る力について再認識を迫るものであった。

「海から世界につながる、あるいは波が打ち寄せてその波に乗って未来へ」ということが今回のテーマに秘められたメッセージなのだろうと想像したが、私の遭遇した作品群は、単に近代の表現への安住を志向するものではなく、個々の作家の思考と視座に基づきながら、社会に強く関わって行こうとするものであった。この研修は、アートの存在意義について深く考える機会を与えるものとなった。

彫刻部会員(運営委員)

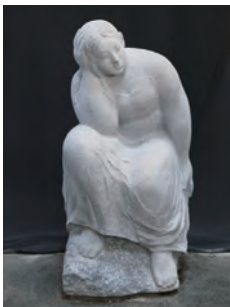
豊田 晴彦氏



二〇二三年一月六日逝去
享年76歳

略歴

一九七〇年 第55回展 初入選・特選
一九七二年 第57回展会友推挙
一九八七年 第72回展会友賞
一九九一年 第76回展会員推挙
一九九八年 第83回展ローマ賞
二〇一七年 第102回展会員賞



海の響きを懐かしむ 第103回展出品作

絵画部会友

佐野 武夫氏

二〇二三年十二月十八日逝去
享年88歳

略歴

二〇一〇年 第95回展記念賞
二〇一一年 第96回展会友推挙

豊田さんを偲ぶ

前田 耕成

彼とは妙に馬が合っていた。具象と抽象の作風の違いはあれ、同じ本松石を使う作家同士、真鶴の石屋の作業場でずっと制作を共にしてきました。二科会では50年来の仲間でもあり、私にとっては2歳上の兄のような存在でしたので、何でも話せる間柄でした。以前、豊田さん、松井さんと私で彫刻部事務局をした時の様々な出来事や失敗などが懐かしく思い出されます。その一つに彫刻部懇親会で彼が突然トランペットを吹き出したのに驚かされたのが後に分かったのですが、トランペットはあの日のために週一で銀座のヤマハに通ってレッスンを受けていたそうです。こんなライフワークを持ちながら真摯に彫刻に向かう彼が私には大きく見えました。二科展に出品する作品についても、お互いの彫刻観を認め合うことができていたので、どのような意見でも素直に耳を傾けることができました。でも今はもう彼の声はなく、真鶴の空も海もひとりで見なければならぬのが無性に寂しく残念でなりません。

第四十五回

定時会員総会

令和5年5月27日 午後1時15分より 国立新美術館講堂において

会員総数196名 出席会員86名、委任状110名を以って総会成立。

出席理事
生方純一 埴 珠世
山中宣明 西 健吉
中原史雄 吉野 毅
島田紘一 中島敏明
横前秀幸 野村みそら
田川絵理 尾崎 功
加覧裕子 濱田 進
登坂秀雄 小田信夫
前田耕成
出席監事
岩田 博 津田裕子

議事に先立ち、令和5年1月6日に逝去された彫刻部・豊田晴彦会員に黙祷を捧げた。

議長に生方代表理事を選出し、議事録署名人に生方代表理事、吉野、埴、各常務理事を選任し議案審議に入った。

第1号議案

令和4年度事業報告
吉野常務理事の資料読み上げにより、確認のうえ了承された。

第2号議案

令和4年度決算承認・財務諸表・同決算書による監査報告
生方代表理事兼財務部部长より、コロナ禍により通常会計にない状況の説明、報告があり確認の後、岩田監事、津田監事より監査報告があり、承認された。

第3号議案

令和5年度事業計画報告
吉野常務理事より、今年度事業の項目、内容についての説明があり、事業計画が承認された。

第4号議案

令和5年度正味財産増減予算書報告
生方財務部部长より報告資料の確認において、これを承認した。

第5号議案

定款細則変更の件
吉野常務理事より、以下の変更についての詳細説明がなされた。
・新設された運営委員について(運営委員は理事を補佐する事、並びに一般会員の意見を二科会運営に反映させる事を目的とする)
・細則、ハラスメントの相談窓口を置き、監事がその任に当たる。



絵画部会

◆絵画部 部会報告

引き続き同講堂に於て絵画部会が開かれた。

107回展絵画審査会は国立新美術館のコロナ禍の人数制限の解除となり代表審査から全会員による審査会に戻すことが賛成多数で決定された。審査業務の役割分担については、審査に集中できるよう、運営委員、業務経験者を中心に分担表を作成し、業者を補充し出席状況で今後調整をするなど報告の後、会員から審査会における状況、現状、審査結果についての懸念や質問の発言があった。

「出品者減の状況にあつて、入落選、受賞、推挙のバランスが懸念される」「1点出品で初入選などの出品者がその後継続して出品し作品の向上に寄与できているのか、追跡、分析が必要ではないか」「等々、会員のこれらの懸念や発言はネガティブに捉えることではなく、全会員の審査権の尊重と合意において今後の審査会の方針を討議する必要がある」とも定めるものであった。

107回展会場構成について、主に3階についての新しい展示方法の説明がプロジェクトによってなされ、2024春季二科展については新企画として小品カテゴリー・S20号の公募実施の説明が山中、中原常務理事よりなされた。

(T)

◆彫刻部 部会報告

定時会員総会後、彫刻部会が開催された。まず故豊田晴彦氏のご冥福を祈る黙祷の後、新会員、会友、役員、除籍者の報告がされ、登坂理事より107回二科展の取り組みについて報告。

①リモート会議のアカウント(二科会)を取得した。②パソコンのアップグレード等の経費は期間限定で補助金を出す。③オープンングトークは受賞者のスピーチをメインとする。④一般出品者、会友との交流の企画(茶話会、懇親会等)を充実させる。⑤キャプションを見やすく工夫する。

その後、議長(宮澤会員)選出、彫刻部総会の成立を確認し審議事項にはいる。

(一)、次期選挙管理委員に安田正子会員が選出される。
(二)、会員総会での細則授賞規定の変更に伴って彫刻部授賞規定の見直しがされる。

(三)運営委員会、理事会の議事公開に向けての状況報告。「理事会便り」的なもので良い、役員会で話されている内容が分かるようにして欲しい、と要望が出る。

最後に事務より連絡事項と、阿部昌義会員の事務任期満了の報告があった。

(友)

第107回二科展 日程表

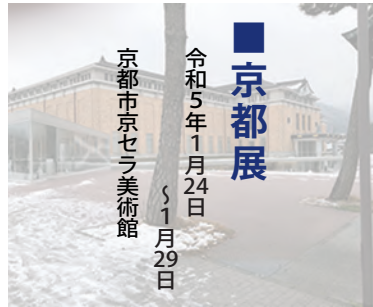
8月
24日(木) 搬入業者・個人
25日(金) 搬入個人16時まで
26日(土) 29日(火) 審査
30日(水) 入落通知発送
9月
1日(金) 2日(土) 業者選外作品搬出
3日(日) 選外作品搬出・彫刻
4日(月) 5日(火) 個人選外作品搬出
5日(火) 展示日
6日(水) 展覧会初日
オープンングトーク
11時
作品研究会12時
授賞式14時
懇親会18時
支援講座・ワークショップ
8日(金) ワークショップ
12日(火) 休館日
15日(金) 講演会
18日(月) 展覧会最終日
14時まで
19日(火) 搬出(絵画・彫刻)
20日(水) 搬出(絵画)

一般の出品規約は
下記のQRコードから
ダウンロードできます





今回の京都巡回展は、美術館の使用申請許可の都合上、例年よりだいぶ遅い時期の1月末の開催となりました。会期中の天候を心配しておりましたが、大寒波のため、初日の急な積雪で交通に影響が出て、遠方の出品者が動けず、当番など近くの者で対応するという状況となりました。



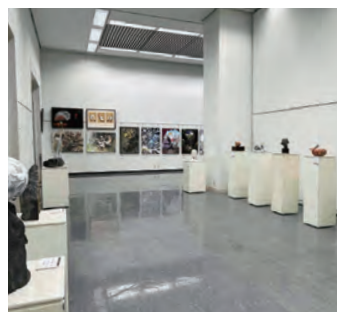
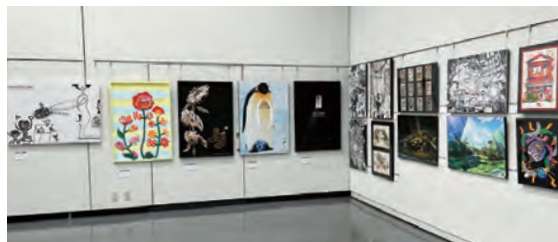
4部門の展示作品総数は282点で、絵画133点、彫刻14点、デザイン58点、写真77点の作品が並び、絵画部は全国巡回の会員、受賞者、地元の会員、会友、一般の作品133点（全国巡回48点、地元85点）、彫刻部は14点（全国巡回10点、地元4点）の作品が展示されました。会場があまり広くないため、前回窮屈な展示となった反省を踏まえ、全国巡回の作品を減らしたのですが、今回は2点入選が多く、作品点数としては前回より多くなりました。備品の不足やスペースの問題など、今後の課題はありますが、外光の入る独特な空間で、彫刻との融合展示



は落ち着いた良い展示空間になったと思います。京滋関係の受賞者は、会友賞…平澤紀久子、島崎紗椰、特選…林里美、鈴木健一、新人奨励賞…加治木成美、会員推奨…邑井吉治、柳澤綾子、会友推奨…山本知子の各氏でしたが、今回は会員推奨の方が2名おられ、今後の活動が期待される展覧会となりました。積雪のため、会期前半は来場者が少なかったものの、最終土日に挽回して入場者総数は3,542人と前回に近い数となりました。悪天候にも関わらず、多くの方に来て頂き、一同安堵して終了することが出来ました。（入佐 美南子）



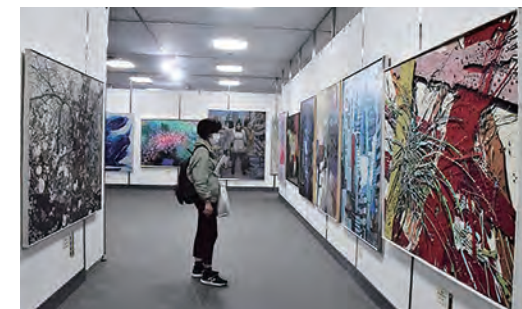
広島では正月明けが恒例となっている二科巡回展、今年はコロナの影響もあり、開催が危ぶまれましたが、写真部、デザイン部、関係者のご協力を頂き、ウィズコロナの中で、2月7日、初日を迎えることが出来ました。開会式やギャラリートークは取り止め、展示だ



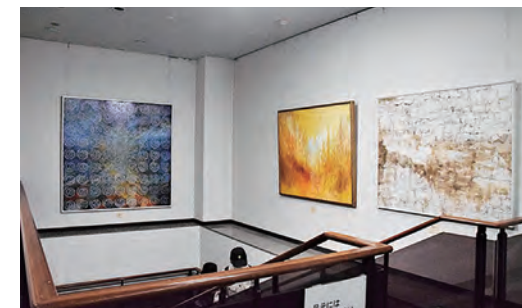
けの展覧会となりましたが、続けることの意義を考えさせられる巡回展でした。又、会場のレイアウトも従前と違った配置を試み、開放的な展示会場になりました。出展数は巡回作品に地元作品192点を加えた4部門合計472点。入場者数は2,730人と大幅に少ない展覧会となりました。巡回展の継続は参加者の数やモチベーションが大切です。何とか続けていく気持ちに次回に繋がっていくことになります。各都同人の皆様、部門を越えたご協力お疲れさまでした。（高松 良幸）



大阪巡回展は例年の会場であった大阪市立美術館が改築のため、2022年11月3日より11月13日まで、兵庫県の尼崎市総合文化センターで開催しました。劇場やホールを備える地域の一大文化施設ですが、会場スペースの都合により、絵画93点（全国巡回作品11点、関西の会員大作5点、会友17点、一般60点）、彫刻4点（会員3点、会友1点）、デザイン128点、写真129点の総出品点数354点の展示になりました。絵画部の巡回作品は11作品に制約され、地元の2点入選者の作品も全て1点ずつの展示になるなど、例年に比べ、かなり縮小した展示となりました。出品者



大阪巡回展は例年の会場であった大阪市立美術館が改築のため、2022年11月3日より11月13日まで、兵庫県の尼崎市総合文化センターで開催しました。劇場やホールを備える地域の一大文化施設ですが、会場スペースの都合により、絵画93点（全国巡回作品11点、関西の会員大作5点、会友17点、一般60点）、彫刻4点（会員3点、会友1点）、デザイン128点、写真129点の総出品点数354点の展示になりました。絵画部の巡回作品は11作品に制約され、地元の2点入選者の作品も全て1点ずつの展示になるなど、例年に比べ、かなり縮小した展示となりました。出品者



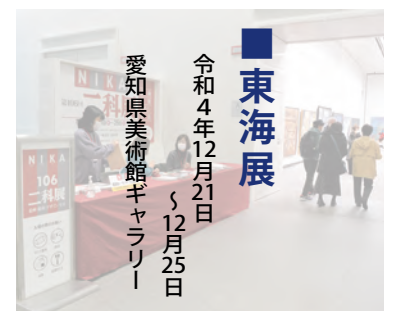
や来場者に対し大変申し訳ない気持ちでいっぱいでしたが、面積、天井の高さ、エレベーターの制約を鑑み、色々とレイアウト案を練った上での苦渋の決断による展示でした。狭さや暗さなど、決して恵まれた展示会場ではありませんでしたし、昨年に比べ会期が2日少ない日程の中でしたが、総入場者は11,063人（昨年14,278人）と、まずまずの入場者数を得ることができました。本年度も同じ会場での開催が決まっておりますが、様々な制約の中より魅力的な展覧会にするためにはどうすればいいのか、みんなと知恵を絞って考えて参りたいと思っております。（高畑 彰）



世の中はクリスマスシーズンに入り、美術館などに足が向かないのでは、と心配しつつ始まった第106回二科東海展、初日から大勢の観客に恵まれ、5日間の入場者数は4,312人となりました。今回は3年に一度の「国際芸術祭あいち2022」の影響で、会期も12月、展示スペースも2部屋減り、巡回作品の展示数は、昨年より30点少ない



絵画168点、彫刻26点、デザイン134点、写真245点でした。絵画部では9名の初入選者と14名の受賞者がありました。絵画部の出品者は121人ですが、北川民次先生や安藤幹衛先生を知らない人も増え世代交代を感じます。彫刻部は3名の初入選者と、会員推奨1名。新設されたカテゴリー30は、30cm立方の小作品。昨年より11点多い作品の展示方法について何度も話し合い、新しい試みとしてロビーやラウンジにも展示スペースを設けました。会場に入ると、ロビーに展示された大きな牛の彫刻が人目を引き話題になりました。新型コロナ感染症も収束し、第107回展を一層盛り上げていきたいと願っております。（堀尾 一郎）



支援・地区活動報告

第22回 二科北海道支部展(絵画部) 2023年5月9日～5月14日 大丸藤井セントラル 7F スカイホール

第22回二科北海道支部展 支援講評会

横前秀幸

開催日前日に生方理事長と展示作業中の会場に入り、三年ぶりの支部同人の皆さんが制作上どのような不安や苦悩から自分を守り、時間の問題を乗り越えてきたか考察する機会となりました。作者の築こうとする世界を二人で眺めて、伝わってくるもの、聞こえてくるもの、潜んでいるもの等を二日間話しました。

純粋に感動をぶつけた作品、日常の詩的作品、本質に近づきたい作品、夢や希望が溢れる作品等、色彩や構図などに北海道のおおらかさが感じとられ、一種の地方色の大切なところが表現されていて、北海道は二科展にとって潜在的に可能性が豊かにあることを知り得ました。また全国共通の、従順は制作上美德であることが慣例化している今、より依存心が増大して、自己開拓の造り出していく芽を摘み取ってしまいます。情性からのがれられないとしたら、自分で梯子を外す勇氣も植え付けることも教えていけないと、二科展の進むべき方向に重要な「自由な精神が次代の人を育む」ことにつながっていないと思います。

第7回 二科東北支部連合展 2023年5月26日～5月30日 秋田県立美術館

四国と東北の支援について

中原史雄

松山、秋田の展覧会は、それぞれに豊かな風土を感じさせる力作が並んでいた。そして手際よく仕事をする支部の人達の姿とともに遠くへ来た疲れを忘れていたのだった。まず5月20日に西・中原で四国合同展の懇談に参加し、その後講評に。愛媛県立美術館での展覧会は、会友の愛媛支部長が中心に支えているが、後継者に不安がある。いま出品者のいない香川県も含め、四国各県の連携と出品者確保のため二科会としてこれからも支援の在り方を考えていきたい。

5月26日、生方理事長、塙、彫刻の前田、中原で東北連合展に出向いた。昨年までのせんだいメディアテークから秋田県立美術館に会場を移しての開催で、4人が担当を決め講評を行なった。また、前日には講演と、各支部長の懇談によって来年は青森で開催、その後も他の地域での開催に努めると決めた。こうした地域の活動が二科展を支えている。

あの広く美しい国立新美術館で今後も二科展を良好に開催していくには多くの難題がある。来年は役員の改選。プラス思考で会を導いていく新しい風も不可欠。一人一人の熟考に期待したい。

第7回二科東北支部連合展を 終えて

秋田支部長 石黒厚子

第6回展までは仙台での開催でしたが、今年から持ち回りになり、会場を秋田に移しての第7回展でした。

会員、会友、同人作品68点と賛助作品11点、47名の絵画と彫刻計79点を展覧。

今回の開催では宣伝を一番の目標に、ポスター等を中学、高校に配布しました。二日目の朝一番の入場者は先生と27人の校外活動の中学生でした。ワークショップには平日でしたが17名、部外者は6名の参加者が、中原先生の丁寧なご指導でひとりひとりプロジェクトで投影し作品完成までの構成で生まれ変わる過程を共有し、意欲を持つことが出来ました。

午後のギャラリートーク研究会は支援担当理事の生方、塙、中原、前田先生方による全作品の直接指導で、今すぐ描き直したいの声も上がり、多くの人々が熱心に聞き取りました。

「東北の作品にはおおらかさがある。土地の環境を生かして、伸び伸びと描いてほしい。展覧会を通じ絵を描く面白さを伝えたい」と中原先生は話され、一同感激しております。

県外者や外国人も多く見られ、5日間で702名の入場者でした。



東北支部連合展 ワークショップ

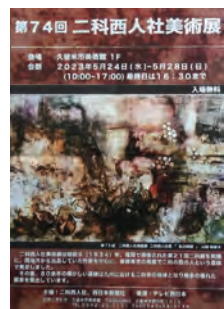


東北支部連合展 会場



二科西人社美術展 会場

—歴史ある地区展— 第74回 二科西人社美術展 2023年5月24日～5月28日 久留米市美術館



二科西人社美術展報告

田浦哲也

第1回展の出品者に坂本繁二郎、東郷青児(西人社の名付け親)等が名を連ねる歴史と伝統ある展覧会です(二科ニュース26号にその歴史の一部が紹介されています)。戦争中、戦後の混乱、コロナ等いくつかの中断はありましたが、今回で74回目を迎えました。

山口・福岡・大分・佐賀・長崎の5県の二科展出品者と推薦出品者で構成され、秋の本展に向けての研修を兼ねた展覧会です。新作80点のなかには、本展に初出品の推薦作家、106回に初入選したフレッシュな感覚をもった作家も出品しており、新たな風を感じることができました。一般出品者・推薦作家の中から優秀な作品に賞が贈られ、大賞の二科西人社賞は、70歳のベテラン高橋廣行さん(佐賀県)が受賞しました。若手の頑張りには負けないベテランの経験豊かな味と技を発揮しました。新人・ベテランお互い切磋琢磨しながら、秋の二科展に向けて制作に力が入ります。その活躍が期待されます。



鹿児島展

令和5年3月5日
～3月12日
鹿児島県歴史・美術センター
黎明館

新型コロナウイルスの様々な制限が残る中、今春も無事に第106回二科展鹿児島巡回展を開催することができました。今年に入り、新型コロナウイルスに対して緩和の動きが徐々に見られたおかげもあり、これまでの自粛による落ち込んだ雰囲気を取り戻すかのような賑わいで、来場者は2,466人と来年度の107回展に向けての勢いを予感させる展覧会となりました。



今回の巡回鹿児島展では、絵画130点(会員104、受賞者5、地元・宮崎21)、彫刻11点(会員10、地元1)、写真88点、デザイン93点が展示されました。初日の西先生をはじめとした会員の先生方のバラエティに富んだ内容のギャラリートークは、来場者の皆様を楽しませていました。また、会場の一角では、例年恒例になっている会員・会友を中心とした小作品のチャリティ販売を行い、作品の売上の一部はユニセフのウクライナ支援として寄付させていただきました。来年少し何の制限もないコロナ以前のような賑わいを見せる巡回展になっていることを願い、更に充実した巡回展へとつなげていきたいと思っています。

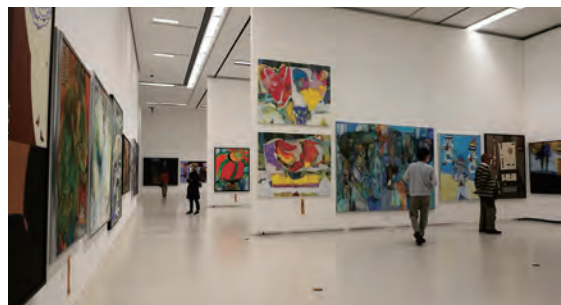
(野平智広)



福岡展

令和5年3月14日
～3月19日
福岡市美術館

前回(105回福岡巡回展)は、福岡では3年ぶりの開催となり、コロナの影響を多々受けながらの厳しい開催でしたが、今回は、久々に会場を福岡市美術館に移し、コロナの影響も薄まる中3,261人の入場者を迎えることができました。会場が変わったことに加



えて、以前使っていた会場の広さ比べると半分以下になった会場をどのように使うか、絵画・彫刻・デザイン・写真各部の組み合わせ・構成等、かなり打ち合わせが必要となり、熟考を重ねました。最終的には、各部の協力により見やすいスムーズな流れを作ることができたように思います。当巡回展のみの西日本新聞社賞を選考し表彰を行っています。今回絵画部は小川憲一(福岡)、西本誠長(崎)、迫田淳(山口)、デザイン部は佐藤寛子(福岡)、写真部は丹生昇一(福岡)の5氏が選出されました。例年開催のギャラリートークは、3月14日(火)と3



月19日(月)、会員・会友等により解説を行いました。今回、東京都知事賞を受賞された谷口貞久会員(奈良)、瀧澤賢福運営委員(大阪)が突然ご来場になられ、急遽3月19日のギャラリートークにご参加いただき、貴重なお話をいただけましたことは、大変ありがたく聴講者にとって大変貴重な体験となりました。

入場者へのプレゼントは出品作家制作の色紙プラス鶴田英輝新会員のご努力でいただいた協賛者からご提供された豪華フェリーでの旅行(神戸/大阪・泉大津・釜山)、リゾートホテルの宿泊券等をプレゼントしました。

西日本新聞に、野口睦幸会員、田浦哲也会員の出品作品と展覧会の紹介が掲載され、有明新聞に、牟田志津子会友、塚本和美会友、鷹尾重徳氏の作品が掲載されました。またテレビ西日本、ニュース等でも展覧会の様子が紹介され、内閣総理大臣賞の作品紹介・インタヴュー等も紹介されました。また、福岡県美術協会広報誌FASに、小野由紀子会員の作品と展覧会の告知が掲載されました。

(田浦哲也)

第107回二科展 巡回展日程(予定)

- ◆東海展
愛知県美術館ギャラリー
令和5年10月3日(火)
～10月9日(月)
- ◆金沢展
金沢21世紀美術館
令和5年11月9日(木)
～11月19日(日)
- ◆京都展
京都市京セラ美術館
令和5年11月21日(火)
～11月26日(日)
- ◆大阪展
尼崎市総合文化センター
令和5年11月28日(火)
～12月10日(日)
- ◆広島展
広島県立美術館
令和6年1月23日(火)
～1月28日(日)
- ◆鹿児島展
鹿児島県歴史・美術センター
令和6年3月3日(日)
～3月10日(日)
- ◆福岡展
福岡市美術館
令和6年3月19日(火)
～3月24日(日)

第107回二科展 支援講座・ワークショップ

◎塙 珠世 支援講座

「茶碗のひびから白馬が
翔んだ。描くって楽しい！」
ワークショップ

「形を自由に動かしてみよう」
（午前の部 10時30分）

◎黒川彰夫 支援講座

「色面構成から思わぬ景色が
見えてくる」
ワークショップ

「色面構成からの発見」
（午後の部 13時30分）

日時：9月8日（金）

場所：国立新美術館 講堂

応募：参加ご希望の方は左の
QRコードを読み込んで
応募申込書を手入れし
FAXまたはメールで
送信して下さい。

送信して下さい。

nika@nika.or.jp

参加費：3,000円

定員：70名（先着順）

講演会

◎中山ダイスケ氏

（東北芸術工科大学学長）
「生き方としてのアーティスト」
中原常務理事との対談

「柔軟な発想には何かが必要か」
日時：9月15日（金）14時～
（対談は15時～15時30分）

場所：国立新美術館 講堂

参加費：3,000円

定員：70名（先着順）
詳しくは
こちらから↓



2024 春季二科展新企画予告 NIKANika / S20 春季二科小品コンクール

新企画として絵画部での
公募・実施が決定しました。
20号Sサイズ限定、素材・
支持体自由、ノンフレーム。
自由な発想で新たな制作意
欲を刺激し、会場の展示空
間に膨らみを持たせるもの
になると期待されます。

詳細をさらに検討し、募
集要項でお知らせします。
新規出品者のみならず、
会友、支部の皆様、2024
春季二科展に新鮮な風とな
ってご参加を。

■支部長交代

熊本支部 木戸征郎支部
長から高見愛新支部長に、
東海支部 三後勝弘支部長
から堀尾一郎新支部長に交
代しました。永年のご指導
に御礼申し上げます。

お詫びと訂正

◆二科ニュースNo.79 4頁
新人奨励賞 加治木成美さん[京都]が
抜けていました。

◆2023春季二科展 作品集 31頁
個展ブース選抜者
（会員）→（会友）（会友）→（一般）
お詫びして訂正いたします。

2023春季二科展の展示者数と展示点数

会場：東京都美術館 会期：2023年4月19日～5月2日

	(絵画)		(彫刻)		展示者数	展示点数
会員	155名	155点	57名 (会友8名含む)	57点 (会友8点含む)	212名	212点
選抜者	55名 (賞3名)	55点	7名	7点	62名	62点
計	210名	210点	64名	64点	274名	274点

田中良先生の百歳を祝う
二科メンバーからの色紙



事務局だより

新型コロナウイルス感染
症は「新型インフルエンザ等
感染症（2類相当）」とされ
ておりましたが、令和5年
5月8日から「5類感染症」
になり、感染対策の実施に
ついては個人・事業者の判
断が基本となりました。

街の中は活気づいて参り
ました。二科会はコロナ禍
で学んだ事を活かして慎重に
コロナ前の賑わいに戻せた
らと考えております。

2023 春季二科展では、
五月の誕生日で百歳を迎え
られた田中良名管理理事長に、
メッセージとして春季展会
場で絵画・彫刻メンバーや
関係者でお祝いの寄せ書き
をしてお届け致しました。

昨今、出品者も観覧者も高
齢化が進む中、会場で作品
を目の前にした方々が「百歳
でも現役で絵筆を持つて事
は素晴らしい。優しくて笑
顔が素敵！」と田中先生の
益々のご長寿を口々に話さ
れていました。

毎年新しい試みを加え
てきた春季二科展。来年
2024 春季二科展より、
S20号サイズによる「春季二
科小品部門コンクール」を公
募いたします。出品規約等
はこの秋に出来上がる予定

『表紙の言葉』

田浦哲也

学校や職場で、「がんばれ！」「やればできる！」「やる気をだせ！」と言われ、そこそ自分なりではありますが努力はしてきたのかもしれませんが、よくよく考えると、他人にもそのような期待をし、有難迷惑なお世つかいをしてきた時もあるようにも思えます。

この絵のタイトルは、「WILLIN」としました。いたたまれない不条理に精神が萎えていても、生命の危機に直面し不安な日々をすごしていても、わくわくする喜びに期待出来るなら生き生きと生きていける。そんなものを与えてくれるのは、僕にとって絵なのです。疲れている、時間がない、追い詰められている、でも自分の心の電源を繋げれば、WILLIN…みずから前向きに、わくわくしている！そんなふうに絵に向き合いたいものです。みずからの反省を込めてこのタイトルとしました。

編集後記

◆実験的制作の場としての
春季二科展は今年も盛会であ
った。フリースペース、
個展ブース、抽象作品、具
象作品、斬新な構成、会員
による講演会など、二科会
が掲げる「流派の如何にか
わらず、新しい価値を尊重
し、創造者の制作上の自由
を擁護し、拔擢する」の精
神が象徴された春季展であ
った。コロナ禍で学んだ制
作者としての精神性を目の
当たりにできる意欲や企画
が会場のそこかしこに窺え、
各委員会の奮闘ぶりも垣間
見えた春季二科展であった。
多くの報告を網羅し紙面構
成したいと思いつつ、ここ
に80号をお届け致します。

（深見）

編集委員会

委員長	（総）	深見 まさ子
委員	（総）	寺田 真
委員	（総）	渡辺 俊文子
委員	（総）	酒井 とし子
委員	（総）	山口 博司
委員	（総）	上田 快

令和五年七月二十日発行

公益社団法人 二科会

〒100-0022

東京都新宿区新宿4-3-15

レイフット新宿 501号室

電話 03 (3354) 6646

FAX 03 (3354) 4768